

竹波学園研究都市粉碎へ突撃せよ

東京教育大学 大学院文学研究科自治会

('69. 4. 19)

「教育大斗争報告集会」に結集された全ての、革命的労働者 市民、学生諸君!! 続此狂う国家权力・大学当局の激しい鎮圧の中で、大学院生の先頭に立つて、教育大の筑波移転に反対し、無期限ストライキでもって戦斗的に斗つてくに文学研究科自治会より、斗う至その人民に國に連帶の訴捲を送りたり。

教育大斗争の意義

「筑波研究学園都市計画」は、アメリカ帝国主義のベトナムでの敗北、ドル・ボンド危機による先進帝國主義国の再編過程の中で、日本独占資本が、資本の自由化・開放経済体制のとく、先進国市場および東南アジアを中心とする後進国市場における熾烈な構想されたものである。それは「自主技術」開拓のために、従来の、各独立による企業内研究、大学への依頼研究という「産学共同」における個別独占間の無政府的状態を、国家的視点から、一大一共同研究所として、国立研究機関・大学を一ヶ所に集中し、國家が一元的に支配せんとするものである。スルジョワジーの死活をかけたものとして、既成の学問・研究体制にわざわざされることなく、遂行されようとしている。科学・研究成果が、國家独占により、直接的、一元的に流藉されるのである。

他方、六三年中教審答申に才向づけられた、大学の目的別再編成、後期中等教育の格差化の一応の完成をもととして、六五年学芸学部の名称変更の延長線上に、教育大の筑波移転は、大学教育の帝国主義的突破口として、個別具体的に存在する。『大学、院大学』として構想される「筑波新大学」は、産学共団、大学の格差化、複線化を基軸とする教育のフルジョワ的再編のまさに「モードルケース」であり、六九年中教審答申の規定体である。そこにおいては、副学長制、研究・教育・管理運営の分化、二者別一的政治と学問の分離による学生自ら活動の制限・疎外化をもつた労働者を訓育・養成しようとしているのである。

科学技術の資本による一元的支配、教育の帝国主義的再編を一身に体现するものとして、教育大の筑波移転は、個別具体的に推進されようとしている。既成の大学をのりこえて、研究・教育労働者予備軍としての我々が、教育大斗争を語る"のではなく、"斗う"契機と

なったものは、教育大學における既成の教官リ研究者労働者の「知性の荒廃」「精神の腐敗堕落」に対する即目的反撲であった。近代化路線上に位置する移転推進委員会は、ニ一世紀に向けて、社会の各分野で活躍できる、主体的な創造性をもつた人材を育成するため、国際A級の水準（オニ回筑波ビジョン討論会）の研究教育施設をもつた「筑波新大学」を作ろうとしている。彼らは、教育大の敷地の狭少、キャンパスの分散化、建物・施設の老朽化を理由に、「筑波へ行けば、土地が広く、研究設備も良くなり、各種研究所もできる」と、大学の根本的理念を欠落したまま、自己の即目的、利己的 requirement に、強权的に权力と一体化して「筑波移転」を推進してきた。政府独占資本の野心を託した「筑波研究学園都市」の反人民的性は、彼らの論理の射程に入らない。彼らにとって、学生自治活動の压殺は筑波移転計画実施の手厚い保証である。まさにロックアウト下における現在のキャンパスこそ、彼らの夢である「筑波新大学」の現実化なのだ。機動隊常駐下の大学で、「研究教育の正常化」のため、検内に立ち、「秩序維持の誓約書」を強要し、「タテ看」・「集会」の禁止に狂奔する彼ら教官の「醜態さ」こそ、まさしく現在の大学の姿そのものなのだ。

つまり、政府独占資本の「筑波研究学園都市」計画の反人民性を、自己の論理の射程内に捕えることなく、自己の即目的な利己的工ゴイズムで、移転推進に賛成した彼らの論理必然的結果加、現在の「營學共同」の学内状況を現出せしめたのである。かゝる彼らの認識の物質的基盤は、「講座制」であり、それを基幹にして、講師・助手・院生・学生に対する階層的支配（そこでは、下級者と上級者との人格的關係が規範化され、研究業績評価の規制原理として作用する）と、「学問の自由」という虚偽意識のもとでの社会的関連を切斷された「学界ギルド」の内構成する漆裂なのだ。われわれは、單に「講座制」解体によって、このような研究教育労働者の再生産を阻止できることは思わない。研究の技術主義的、個別分析傾向は、近代化リ資本主義化と共に進展した日本の学問全体の帰結であろう。従つて我々に提起されたのは、日本の学問全体の歴史的範囲および「大学内」でそれを支えってきた研究者の果した役割の総括の必要性であり、その果てには、「日本の変

「革」の問題が重々しく頭を搔いてくるであろう。

まことに、文書教授会を中心とした移転反対派の教官も、本質的には移転推進派の教官と何う変わらない。自己の即日即効工事ができぬことを申しに、前波へ行けば、「国書館・出版社等から遠くない」、研究が不純であるなどいう彼らの論理には、研究者としての意義性、精神的誠実さが乏しい。彼らは、推進派の連絡会議と並行して、更なるは、葉の裏の連絡会議を採り、と云ふのは、まさに叶に。流動移転闘争六年の歴史は、文書部教授会誕生の歴史である。大學圖書室教授会の当時の不和、自己の特権と地位の維持に汲汲した彼ら反対派教官にとって、施設移転は彼らの安樂座妨害するものでしかなかつた。彼らの根柢に少しあヤンバヌ論にて、互いつれられた反対派教官の最終の「切り札」であり、西波、校宮落成尾聲とする利害の調整であり、政治的妥協の產物であったが、内密にかやうえ然ツキヤンバヌ論が敗北するのに当然である。

筑波移転は彼らの安樂座妨害するものでしかなかつた。彼らの根柢に少しあヤンバヌ論にて、互いつれられた反対派教官の最終の「切り札」であり、西波、

校宮落成尾聲とする利害の調整であり、政治的妥協の

產物であったが、内密にかやうえ然ツキヤンバヌ論が敗北するのに当然である。

筑波移転に反対する彼らの立場は、現象的には学生院生と教官が一致していながら、ありながら、自己の管理者としてその立場から、斗争の様々な

方面で学生・院生と対立する時の彼らの論理は、「お

よそ」研究者・教育者とらしくない。むしろは、「社会的責任」のため、大学院入試を廃止する。

われわれは、彼らが既成の大学秩序②教授会自治とハウルート③洗つて来る限り、機動隊導入・ロッ

クアウトという暴転推進派の攻勢に抗しなれば、

かりか、彼らの擁護してやまない「大学の自治」さ

文喪失してしまつて、有効な反対運動を組織しないただらうことを確認して、彼らが「教授会メンバーレ」としての自己を否定して、一人の研究教員的立場を「文書部教授会団交」等で追及していくつもりである。

われわれは、教官層の流波移転問題への対応の中で、見事にまでに暴露されたその知的荒唐、精神的腐敗を即ち的確に、流波斗争に参画してきた。が

がる教官層の存在と、その存在を許し支え、現在の

学問研究体制および大学秩序を脅威から批判し、論理的に精神にする中から、それに代る新しい研究体制の構築を目指す運動を組織化することが可能とな

るのだ。われわれの流波反対斗争はそのような質を持つ斗争として展開されてきた。われわれの斗争は、既成の大学秩序、研究・教育体制の変革の斗争でもあるのだ。

全国の斗う青年研究者との連帯を!

われわれ大学院生は、昨年まで日共リ民青の牛耳る腕勘の無才針性、無指導性、セクト的利害追求のため、混迷と停滞を余儀なくさせられ、主体的・先進的に筑波斗争にとりくむことができなかつた。しかし今や大学院生は、文研を先頭に筑波移転斗争を戦斗的に行き、成長した。国家权力と一体化した大學当局の激しい鎮圧と策動の中で、文字通り長期がつ困難な斗争を繰り返す。われわれの斗争がこれまで獲得したものは微少であるかもしれない。しかし、われわれがこれからなすべきことはあまりにも大きく重い。

既成の大学秩序・學問研究体制を根底から改革し、教官層の知的・精神的荒唐を告発し徹底的に批判する中から、自己変革と媒介に、新しい質と形態をもつた自律的研究者集団の形成を目指した運動が展開されなければならない。さらに、われわれは、東大生斗連・助手共斗をはじめとする全国の斗う苦手研究者諸君との因縁連帯を追求しなければならない。かゝる課題を主導的・先進的に追求する方向の中から、筑波斗争勝利へむけての展望が開けてくるであろう。

われわれ文書研究科(文研)自らは、戦斗的労働者学生・研究者・市民と共に、筑波斗争を最後まで斗争ねくぞあらう。

4/19 教育大斗争報告集会を圧倒的に成功させよう!